

地球温暖化にどう向き合えばよいのか？

2012年8月19日
宇部商工会議所 会頭 千葉泰久

地球温暖化対策として、わが国は中長期的にはCO₂主体の温室効果ガス排出量を2020年までに1990年比25%、長期的には2050年までに80%削減というグローバルな目標を掲げてきたが、元々疑問視されてきた数値に3.11福島原発事故がこの流れをどう変えていくのか極めて大きな影響力を持つようになってきた。

エネルギーは人がこの世で生を営む限り必要不可欠なもので、それをどう生み出すのか？という大命題がいつの世にも存在する。数年前まで中央環境審議会地球環境部会（経産省・環境省の合同委員会）に化学工業の代表として審議に参加していた小職としてはある意味複雑な思いに駆られる日々である。

当時産業部門は、当然のことながら“企業の生き残り”をかけてエネルギー合理化、即ちCO₂削減に励んできたのだが、運輸・民生部門の危機意識が低く今後の大きな課題だとされてきた。皮肉なことに不幸な原発事故がこの危機意識を喚起することになった。即ち“ものづくり”と“日々の暮らし”がエネルギー供給をベースに共通の基盤の上であり 私たちの大切な“国づくり・地域づくり”に繋がっていることが十分に認識されるようになってきたわけである。

わが国では、一次エネルギー供給の80数%を化石エネルギーに依存しており、利用効率も高いので世界に輸出できる技術の一つと考えられる。原子力発電の新たな進展・拡張は未知数なところから、この化石エネルギー利用技術の更なる開発が重要課題の一つとなる。太陽光発電などの再生可能エネルギーの利用も進めねばならない。バイオマスとて結局は太陽・自然からの贈り物なのである。

原発は危ない！ 石炭はCO₂排出量が多い！天然ガスはCO₂が少ない！ ヤレ太陽光発電だ！ オイルシェールガスが頼りだ！とか 様々な意見・考え方があふれる。世界の国々と綱引きをしながら、しかも毎日メシを食っていかなければならないので 政治的にも、経済的にも種々の制約・進め方はあるのだが、誤解を恐れず発言させていただくとすると“自分たちの都合だけで拙速に走るべきではない”と主張したい。

例えば、オイルシェールガスを採取するところからエネルギーの消費即ちCO₂の発生が始まっているのである。これらを使って“ものづくり”がなされ家電製品・衣類・太陽光発電装置など様々なものを”日々の暮らし“に使っているのである。そして長年省エネ製品を使ってCO₂の削減を図る。従って、燃料電池車はCO₂を出さないよ！とか部分的にその価値を判断するのではなく そのエネルギーが誕生した時からその一生を終える時までのライフサイクルで関連するモノの価値を考えるべきである（LCAという）。

そう考えれば、各種の一次エネルギー源の選択にしても オン・オフの拙速な判断をするのではなく “ベストミックス”を実現可能な時間軸も入れて進められるであろう。

以上くどくど述べたがUNCCAが十年前から立ち上がり、日本中で遅れているといわれた民生部門の意識改革の先陣を切ってきたことは、正に驚異に値する素晴らしい活動である。メンバーに加えてもらった榮譽に感謝しながら今後の更なる発展の力になればと願っている。



2011年UNCCA総会にて
来賓挨拶